

『報復の書』

第1巻

父と子と精霊の名において、ここにパヴィアの司祭、囚人にして外国での亡命者リウドブランドの書いた『報復の書』、ヨーロッパの諸王及び諸侯への報いの書が始まり、これをヒスパニアのエルヴィラ司教レケムンドに捧げる。

1章

全ての高潔さに満ちたエルヴィラ司教レケムンド殿へ、パヴィアの取るに足りない司祭リウドブランドがご挨拶申し上げます。親愛なる父よ、貴僧が疑わしい伝聞に依拠した者ではなくこの目で見た確実な知識を持つ者としての私にヨーロッパの諸帝と諸王の事績を記録することを勧めてくださった時から2年もの間、能力の欠如のおかげで私は貴僧のご要望に従うのが遅れてしまいました。以下のような考えのおかげで私はその仕事を始めるのを思いとどまっておりました。すなわち、まず、私の修辞技法の完全なる欠如、第二に批評家の私への嫉妬に対する考慮がそれでございます。その人たちは傲慢で増長しきり、多読で鈍感になり、聡きボエティウスの言葉を借りれば、哲学の外套の切れ端しか持っていないのに自分が完全な服を持っていると思込んで私を冷かして「我らの先輩たちはすでに多くのことを書いてしまったから、すぐに本より読者の方が少なくなくなるぞ」などと喚き散らすのです。そして彼らは劇から「今言われていることで今までに言われなかったことなどは何ひとつないのです」⁶という一節を引用するでしょう。

彼らの雄叫びに対して私はこう答えましょう。学問を愛する者は水腫を患った人のようなもので、この病人たちは酷く喉が渴けば乾くほどそれだけ水をがぶ飲みするように、学習者もまた読めば読むほど新しい知識を熱心に求めるものであると。そこで学習者たちにはキケロの著作の難しい熟読に疲れた時、私の出したものに気晴らしを見つけてもらいたいのです。もし私が間違っていなければ、何らかの実体が割り込んで太陽の光の純粋な輝きを曇らせているのでない限りはこの両の目が太陽の光にくらんで見えなくなってしまうように、我々のアカデメイア派、ペリパトス派そしてストア派の哲学者たちの場合にも、喜劇の有用な滑稽さや英雄的な人たちの見事な歴史での休養を見つけられない限り、精神は理論の不断の勉学で衰弱させられることでしょう。古の異教徒の呪われし祭儀が有益であるどころか聞くことすら危険であるにもかかわらず、本の中の記述するに値すると考えられているならば、カエサルとポンペイウス、ハンニバルと彼の兄弟ハスドルバル、スキピオ・アフリカヌスといった栄光に満ち名高く、彼らに見合う賞賛の全てに値する將軍たちの戦争をなぜ我々が黙って通り過ぎるべきだというのでしょうか？ これらの人たちの正

⁶ テレンティウス『宦官』前口上41行。

しい行いを述べる時に我々は我らの主イエス・キリストの神性を宣言することができ、彼らの過ちを述べる時には主の救済と矯正の手を人々に思い起こさせることができます。

私がこの貧弱な記録に弱い王たちと女々しい君侯たちの事績を挟んだとしても当惑しないでいただきたい。全能の神、父と子と精霊は常に一体で常に正しいのです。当然ながら神は悪しき者をその罪への報いとして滅ぼし、有徳の士をその良き行いへの褒美として高めるものです。我らの主イエス・キリストによって聖人たちになされた以下の約束こそが真実であると私は言いましょう。すなわち「あなたは彼に心を留め、その声に聞き従えば、わたしはあなたの敵に敵対し、仇に仇で報いる。わたしの使いがあなたの前を行く」⁷、と。キリストであるところの英知の声はソロモンの口を通してこうも叫んでいます。「宇宙は主に味方して愚かな者どもに戦いを挑む」⁸。今、毎日起こっていることについては眠っている者ですら分かっています。私は自らの事情については沈黙を守りつつ、存在する多くのことから一例を挙げるつもりであり、皆が知っている通りイタリアとプロヴァンスの境界に位置する土地であるフラクシネトゥムの町のことを私が述べることを許していただけることでしょう。

2 章

我が師よ、貴僧は貴僧の王アブデラハメン⁹に年貢を納めている人たちについて報告を受け取っているためにフラクシネトゥム¹⁰のことを私以上によくご存じであると私は想像しています¹¹。しかし一般の読者のために私はここで述べておきますが、そこは一方が海によって、他の方角が棘のついた木々の密集した下生えで守られています。この遮蔽物に入り込もうとする者がいれば、棘の巻き付いた低木に邪魔されて棘の鋭い切っ先が刺さるため、彼は進むことも引くこともこの上ない難行になってしまったことに気が付くことになります。

⁷ 『出エジプト記』23. 21-23。リウドブランドの引用と今回参照した『出エジプト記』邦訳の本文は多少語句の位置が違う。『出エジプト記』の当該箇所は以下の通り。「あなたは彼に心を留め、その声に聞き従い、彼に逆らってはならない。……もしあなたが彼の声に聞き従うならば、わたしはあなたの敵に敵対し、仇に仇で報いる。わたしの使いがあなたの前を行き、あなたをアモリ人、ヘト人、ペリジ人、カナン人、ヒビ人、エブス人のところに導くとき、わたしは彼らを絶やす」。

⁸ 『知恵の書』5. 21。

⁹ 後ウマイヤ朝のカリフのアブド・アッ・ラフマーン3世（在位912-961年）。

¹⁰ 現代のラ・ガルデ・フラネ。フランス南東部の地中海に面するプロヴァンス地方に位置する。

¹¹ レケムンドはアブド・アッ・ラフマーン3世に仕えており、外交使節としてオットー1世との折衝を担っていた。

3 章

しかし神秘的な事情によって、いやそれ以外ではありえないので神の正しきご判断によってヒスパニアから小舟で航海していた 20 人ほどのサラセン人の一団が向かい風によって意図せずしてその地へと追いやられてきた。その海賊たちは夜陰に乗じて上陸し、気付かれることなくある領主の邸宅に入り込み、——なんと酷い話か！——キリスト教徒の住人を殺した。それから彼らはその地を我が物とし、その邸宅に隣接するムーア人の山¹²を近隣の人たちからの攻撃に対する砦とした。彼らは防衛のために棘のついた木々が以前より高く太く育つのを促進したため、枝に向かって躓く人をその木々は鋭い剣のように貫いた。ついにはその丘への全ての通路は非常に狭い一つの道以外なくなってしまった。したがってこの近づきにくさを頼んで彼らは近隣の全地方への密かな襲撃を開始し、もっと仲間を連れてくるためにヒスパニアへと使者を送り返した。彼らはその地を称賛し、その人々は取るに足らない連中だと言いつつ放った。この誘いに応えて 100 人を下らない新手の集団が彼らの話の真実性を確かめるべくやってきた。

4 章

その一方で、近隣のプロヴァンスの人々は羨望と相互の嫉妬に揺り動かされて互いにいがみ合い、互いの財産を略奪し合い、ありとあらゆる考えうる危害を加えるようになっていた。しかしある党派は嫉妬から起こった憤りに満ちた要求を他の者に対して独力で満すことができなかつたため、前述のサラセン人の助力を求め、この不誠実であるのと同じくらいに狡猾な連中は彼らと組んで隣人たちを蹂躪すべく進んだ。現に彼らは殺人に満足せず、全ての沃土を荒地へと変えた。しかし我らは彼らの羨望が彼らにどう役立ったのかを見ていきたい。ある著述家¹³曰く羨望は常に公正なものであり、彼はこう書いている。

羨望はそれ固有の正しき報いをもたらし

それを抱く者を毒針で指す。

羨望する者は騙そうと試みるあまり自らを欺瞞の犠牲者にしてしまう。他者の火を消そうとするあまり自分の火を消してしまふ。何が起こったか問うことがあろうか？ 取るに足らない力しか持っていなかつたサラセン人は他の党派を助けることである党派を粉碎した後、ヒスパニアからの継続的な増援によってその数を増していき、当初は彼らが守っていたように見えた人たちをすぐに至る所で攻撃するようになった。その攻撃の激しさのために彼らは全ての人々を根絶やしにして 1 人たりとも生かしておかなかつたため、全ての近隣の人々は震えおののき始めた。予言者が言うように「1 人で 1000 人を追い、2 人で 10000 人を破った」¹⁴。どのようにしてか？ 「神が彼ら売り、主は彼らを閉じぎした

¹² 現在のマシフ・デ・モール山脈。

¹³ 聖ヒエロニムス『ガラテヤ人への手紙注解』3. 5。

¹⁴ 『申命記』(32. 30)からの引用。原文は以下の通り。